正　誤　表

●誤表記（下線部）：

1）P62　24行から下

分母のａ と分子に含まれるａ とは本来同じものだが、「分母の ａ は所与」と考えれば、<u>２次形式の変分として線型方程式が得られる。 そこで、分母の ａ を所与として得られる線型方程式に基づいて残差の最小化を図り、これによって得られた $a=a(\theta)$ により分母 ａを更新し、このサイクルでの iteration を行うことで</u>本来の重みに関する最小解に収束させる方法が考えられる。 *1

⇒

●正表記：

分母のａ と分子に含まれるａ とは本来同じものだが、「分母の ａ は所与」と考えれば、２次形式が得られる。 そこで、変分により得られる方程式を、分母の ａ を所与として得られる線型方程式に補正項が乗ったものとして捉え、線型方程式について解くことで近似解法を構成して、このサイクルでの iteration を行うことにより本来の重みに関する最小解に収束させる方法が考えられる。 *1

●誤表記（下線部）：

2）P64　27行から下

・方程式　$\delta(L_1)=0$ $\underline{\;;\;\; 2L_1=g^2{}_{rs}\cdot A_rA_s-2g^1{}_{rs}\cdot A_rB_s+g^0{}_{rs}\cdot B_rB_s \;;\; (\Sigma_{r,s}\text{ 省略 })}$

$A_0\equiv1,\quad g^i_{jk}$ は定数扱いとする。

$\underline{\delta A_r:\quad +g^2{}_{rs}A_s-g^1{}_{rs}B_s=0}$　　$r\neq0$　（Σ_s 省略 ）

$\delta B_r:\quad -g^1{}_{rs}A_s+g^0{}_{rs}B_s=0$　　$A_0\equiv1$　（Σ_s 省略 ）

⇒

●正表記：

・方程式　$\delta(L_1)=0$

$A_0\equiv1,\quad g^i_{jk}$ は定数扱いとする。

$\delta A_r:\quad +g^2{}_{rs}A_s-g^1{}_{rs}B_s=D_r$　　$r\neq0$　（Σ_s 省略 ）

$\delta B_r:\quad -g^1{}_{rs}A_s+g^0{}_{rs}B_s=0$　　$A_0\equiv1$　（Σ_s 省略 ）

ここで、 $D_r \equiv \int d\theta\cdot\cos(r\theta)\cdot[G^F\cdot(P-b/a_{(+)})^2+\kappa\cdot Y(-b/a)\cdot(b/a_{(+)})^2]/a_{(+)}$